

国際交流基金助成事業報告書

薬学部 3年次生 吉田 舞衣

1. はじめに

【事業実施期間】

2016年8月9日～12日

【事業実施場所】

国際学園星槎高尾キャンパス

【事業内容概要】

“Team Medics Summer Conference 2016 (デザインシンキング・リーダーシップワークショップ)”

1 Design Thinking & Workshop

- 1.1 Introduction
- 1.2 Identifying personal values
- 1.3 Defining the problem
- 1.4 Designing a solution
- 1.5 Prototyping
- 1.6 Presentation prep & Feedback
- 1.7 Presentation
- 1.8 Reflection

2 講演会

- 2.1 東京大学大学院国際保健政策学 渋谷健司先生
“Big Ban in Health Care?”
- 2.2 相馬中央病院内科 診療科長 越智小枝先生
“Disaster Public Health and Low Employee Satisfaction”
- 2.3 厚生労働省 医政局経営支援課 吉田拓野先生
- 2.4 日本マイクロソフト株式会社 後藤昌宏先生、宮崎翔太先生
「ITで実現する最先端のConnected Healthcare」
- 2.5 インテル株式会社 清水由香先生
「インテルのヘルスケアへの取り組み」
- 2.6 東京海上日動火災保険株式会社 福田裕一先生
「保険ビジネスの仕組みとコーポレート・ガバナンス」

3 「地球のステージ」代表理事 桑山紀彦先生

コンサートステージ「地球のステージ」

4 Activities

- 4.1 モーニングエナジャイザー
- 4.2 レクリエーション

2. 事業報告



写真 1

Team Medics は首都圏を中心に英語で医療サポートを行う医学生有志団体である。活動内容としては、左写真(写真 1; Team Medics 鈴木あみさん)にあるように、問診票の翻訳や外国人患者へのヘルスケアサービスの紹介、定期的な勉強会や実習を行い、これらを通して外国人患者に対する最適なヘルスケアへのアクセスを実現することを目的としている。今回はこの Team Medics が主催する” Team Medics Summer Conference 2016 (デザインシンキング・リーダーシップワークショップ)” (以下、SC と表記) に一般参加者として参加する運びとなった。

さて、今回 SC では日本各地のみならず世界から集まった、学部学年の様々な 70 名の学生が 3 日間寝食を共にし、外国人診療だけでなくより広い視点から、次世代の医療を担う学生としてこれからの医療に関する課題を考え、それに取り組む機会を得た。このように様々なバックグラウンドを持つ学生に対し、主催者側から以下にあげるようないくつかのユニークなルールが課されることとなる。まず始めに、SC の終わり(正確には懇親会の前)まで、名前以外の一切の情報を公表してはいけないというものである。年齢や学年、学部などのバイアスを排除して、一個人としてお互い対等なチームメンバーとして課題に取り組むためであるという。これに加えて、敬語の使用禁止、昼食時の会話は英語で行うこと、より多くの参加者と関わりあうことなどが示された。

Opening Ceremony を終わると、早速 Design Thinking と Leadership の為のワークショップが開始された。ワークショップは講師に、グローバル教育プログラムを実践している Imaginex の Ms. Jessy, Mr. Raiki, Mr. kazu, Mr. Alex を迎え Global Healthcare leaders に必要な essential tips をこれらのプログラムと” Ideal Hospital” という課題への取り組みを通して学んだ。(写真 2; Ms. Jessy) まず Instruction では講師から” Be open to sharing, speaking”, ” Challenge Yourself”, ” Ask for help”, ” Have fun” という 4 つの Fundamental tips についての説明を受けた。続いて、” Identifying personal values” というプログラムではたくさんの Personalities が書か



写真 2



写真3

真3)

2日目に入ると、いよいよ課題である Ideal Hospital に向けてあらかじめランダムに分けられた3～4人ほどのグループごとに問題設定を行うこととなった。問題を抽出する際には、氷山を例に出し、水面から顔を出している“observing problems”だけでなく水面下で見えづらいもののその氷山の大部分を占める”real problem”に目を向けること、そしてdefiningの前の問題抽出は質よりもとにかく思いついたこと、気づいたことを挙げていく Quantity を重視するようにとのアドバイスを受けた。”Defining the problem”の段階になり、各チームで Ideal Hospital に向けて課題を決定したのち、その問題についてグループ内で解決策を考えていく。ここでもできるだけたくさんの解決策を出し合い、他人の意見を傾聴・受容し、出されたアイデアを加えたりつなげたりすることでより高次の解決策を導けるようグループ内で議論を重ねた。(写真4)



写真4

打って変わり“Designing solution”では、模造紙の敷き詰められた館内を離れ、芝生の上に置かれたフラフープと向き合うことになった。ここでは、8～9人ほどのグループに分かれ、円を作ったのち、手で拳銃を作るように人差し指のみを前に突き出して、その上にフラフープを乗せそれを地面に一人として指を離さずに置くというゲームを行った。(写真5)



写真5

れた一覧表から自分に近いものを5つ選び、最終的に1つに絞る作業を行った。そうして選び出した personal value が実現されなかった場合、自分にどのような感情が沸き起こるか、また他者や社会に向けてどのような反応をとるかを考え、自分自身を見つめることで、本能的な反応行動を起こす「リス脳」から挑戦や機会を得るための「成長脳」への気づき、つまり問題 Problem から Opportunity への転換という概念について深く学ぶこととなった。(写

実際大学生たちがこの動作を完了するのに5分、あるいは10分以上を費やすことになる。それどころか地面に下ろさなければならないはずのフラフープはだれの指示もなしに勝手に上へ上へと上がっていき、方々で「上げての誰一？」や「さげてー！」などの声が飛び交った。これは実際にやってみないと伝わりにくいことであると思われるが、私のグループでもフラフープを下げれば下げようとするほど「勝手に」上がっていってしまうのだ

った。これらのゲームの終了後にこれらのゲームが成功した(つまりフラフープを全員で地面に下ろせた時)、ゲームに失敗した(フラフープが上へ上へと上がってってしまう)要因について参加者全員で意見を出し合った。ゲームが失敗した理由としては「下げてー！」など主語やタイミングを明確にせず、がむしゃらに指示を出したことで、グループの「自分以外」の誰かがフラフープを上げてしまっているという責任転嫁、黙ったままゲームを行ったことが挙げられた。一方で成功した要因としては「いつ、誰が、何を」するかを明確にして指示を出したことで、常に周りの状況をよく見ていたこと、お互いに声を掛け合うこと、指示に対してレスポンスをすること、すぐに人のせいにならず自分のことも見直したことで、立ち止まる瞬間を作ることなどが挙げられた。すべての意見が出尽くし、それを振り返った時に、きっとその時会場にいた誰しもが「そういうことか」と腑に落ちたに違いない。フラフープを地面に下ろすという一見単純そうなゲームを通して、缶詰め状態で作業をし、疲労がたまり視野が狭窄し始めた頃の参



写真6

加者に対し、チームでプロジェクトを進めるために大切な視点を取り戻すための「気づき」を与える非常に興味深いアクティビティの一つであった。

いよいよ課題の仕上げも佳境に入り、最終日のプレゼンに向けて準備をしていくこととなるが、その際に” Prototyping” のレクチャーで、一つの製品を作るのに 5000 以上のプロトタイプを作るダイソンを例に出し、アイデアの深化を図るようアドバイスをいただ

いた。私たちのグループでは一般的に評価の低い病院食を課題として設定し、どのようにすれば患者の食欲が向上するような病院食が提供できるかのアイデアを出し合うこととなった。そこで2つの solutions として病院食を提供する際に患者自身が持参した食器を用いること、そして、患者自身が病院食の調理に参加することを挙げた。前者の理由として自分自身慣れ親しんだ食器を使うことで安心感が生まれること、またプラスチック製の食器ではなく陶器の食器を用いることで精神的にも物理的にも温かみを感じられるというものが挙げられた。後者は、患者自身が調理をすることで、自分が普段食べている病院食の調理にどのような人が関わっているかを知り親近感を感じてもらおうのと同時に、調理師や管理栄養士との交流を通じて、患者からの要望を聞き入れたり、患者に対する質問をしたりすることができる場が提供され、よりよい病院食の提供環境が創造されるというものを挙げた。また、病院食を知ることで、退院後の食事に関する知識も患者自身が同時に得ることができるのではと考えた。私たちのグループでは、食欲をなくしてしまった小児の患者役と調理師役、ナレーター2人により寸劇でプレゼンテーションを行うこととし、発表に向けて夜遅くまで作業を行った。(写真6, 7)

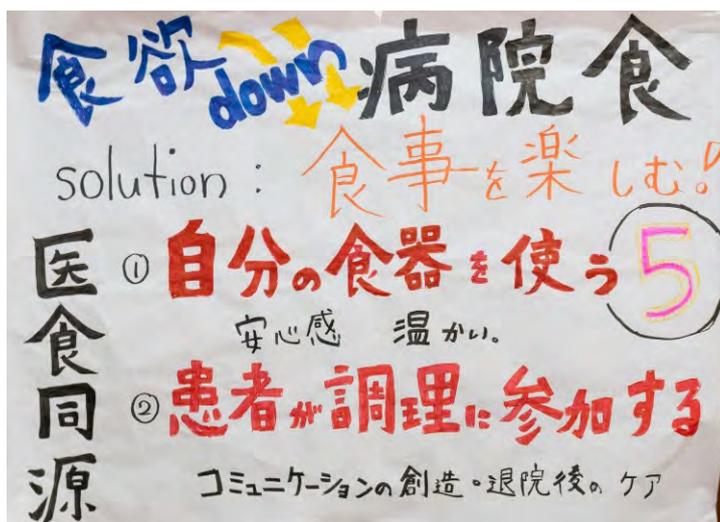


写真7

写真 8



最終日の” Presentation prep & Feedback” においては、異なるグループ同士で3分の時間を計測しながら発表を行い、お互いに気づいた点を feedback し合うことで、午後に控えた発表に備えた。発表では日本語で寸劇をした後、英語でのナレーションを行い、最後に審査員に向けた日本語での説明を行うものだった。(写真8)

どのグループのアイデアも非常に斬新で面白く、今すぐに実現させたい医療サービスや医療デバイスばかりであったし、わずか3日間という短い期間で、初対面だった仲間同士がステージに立ち、一つのアイデアを協力して他者へと発信している現実に非常に感銘を受けた。すべてのプレゼンテーションが終了すると、審査の後、各協賛企業様や先生方と Team Medics による賞の授与が行われた。私たちのグループは残念ながら入賞を逃したが、専門家の先生方からアイデアに対する意見を聞き、問題アプローチに対するエヴィデンスの重要性や非医療従事者の率直な意見をお聞きする機会を得ることができ、非常に実り多いプレゼンテーションとなった。(写真9 ; 集合写真)



写真 9

SC ではメインの Design Thinking & Workshop の合間に、アクティビティや先生方・企業の方々からの講演会なども行われた。

写真 10

国際学園星槎高尾キャンパスは都心を離れ緑に囲まれたキャンパスであり、本学のある大阪を遠く離れた土地でありながら、どこか懐かしさや親しみも感じられる施設であった。



写真 11



宿泊施設は同キャンパスの建物内にあり、4人1組の部屋で3日間寝食をともにした。最初に自分自身の所属を明かしてはいけないというルールが課されていたと記したが、実際はお互いに会話を重ねていく中で、共通言語の違いや話題性などで何となく分かってしまうものではあるのだが、それでも直接はリヴェールせず接していく関係性が、非常に面白いものであった。

食事はそのときたまたま居合わせたメンバーと食べることもあれば、講演にいらっしやった先生とご同席させていただいたり、誕生日ごとに座ったり、最終日には打ち合わせを兼ねてグループのメンバー同士で座ったりと、手作りの暖かいご飯と共に様々な角度からのコミュニケーションを図れる楽しい時間であった。(写真 10; 同じグループのメンバーとの昼食) 朝にはモーニングエナジャイザーと称して、英語でフルーツバスケットを行ったり、夜には宴会場でのジェスチャーゲームや花火をしたりして「学生ならではの」の合宿としての時間も過ごすことができた。(写真 11; 花火文字” SC2016”)

講演会では 1 日目に東京大学、学院国際保健政策学の渋谷健司先生より、ヘルスケアについての時代による定義や認識の変遷、そしてこれから迎える時代において必要とされるヘルスケアに関してレクチャーいただいた。続いて、相馬中央病院内科診療科長の越智小枝先生より、災害医療についてご自身の経験も交えたお話をお聞きすることができた。興味深かったお話の一つとして、多くの人がある一点に集まる異常な集積性(食中毒やテロなどを含め)のなかでは災害時の医療が適応され得るというお話



写真 12

だった。夜には「地球のステージ」代表理事で医師でいらっしやる桑山紀彦先生の、地球のステージを拝見することが出来た。(写真 12; 桑山紀彦先生) スクリーンに映し出される地球上の雄大な自然の映像と共に紡がれる音楽や、先生ご自身の歴史や各国での国際協力、震災後活動の姿などに、ただただ胸を打たれ続ける 2 時間であった。時間にすれば短いものだが、広い地球やそこに住むさまざまな人々、その人生に想いを馳せるの

には充分すぎる贅沢な時間を過ごすこととなった。2日目には厚生労働省医政局経営支援課の吉田拓野先生より公務員の視点から見た医療というものについて、その制度を主としてレクチャー頂いた。そして午後には日本マイクロソフト株式会社後藤昌宏先生、宮崎翔太先生とインテル株式会社 清水由香先生より、テクノロジーを用いた新時代のヘルスケアサービスやデバイスについての大変興味深いお話をいただいた。中でも、バーチャルリアリティを解剖学に応用し、人体を3次元的に見ながら学習する事のできるデバイスは、解剖を実際には行わない薬学生などの医療系学生にとって非常に有益なものであると感じた。最終日には東京海上日動火災保険株式会社 福田裕一先生より、保険ビジネスについてご講演いただいた。医療に携わるものとして身近な事柄であるはずの保険について、実際のところ私たちは殆どのことを知らないまま制度に乗るだけになりがちなか中、ビジネスとしての「保険」の見方を学ぶことが出来たのは非常に有意義なことであった。

3. 事業感想

文中で何度も繰り返すように、3日間、前泊を含めても4日間という本当に短い期間にも関わらず、この報告書には書ききれないほどのたくさんの学びを得ることが出来た。英語系のイベントに参加したいという動機と、スミス先生からの紹介というほんの軽いきっかけではあったが、今ではフォークソング部合宿後の重たい体を引きずってまでも東京に繰り出し、SCに参加出来たことにとっても充実感を覚えている。SCのメインプログラムであったデザインシンキングではチームにおける振る舞い方やものの考え方というものを身をもって知ることができ、同時に、自分の中で曖昧であった、物事が上手くいったときといかなかった時の環境に対する自分のレスポンスというものを、よりクリアに捉えることが出来たように感じる。また、さまざまなバックグラウンドを持つ学生同士での交流を通して、学部間での考え方の差異やコミュニケーションの楽しさ、そして難しさを改めて認識させられた。何よりも強く感じたのは今回のSCのような場もそこに参加する一人一人の存在があってこそ形成されるものであるということである。いたずらに叫ばれる「国際化社会」もそれを構成するのは紛れもない自分であり、そしてその周りに無限にいる他者なのである。誰のために何のためにグローバルスタンダードを導入するのか、熱心に英語教育をするのか。第三者的な目線での「国際化」ではなく、他者とのつながりの中で存在し得る自分自身の姿に気がついた時、「国際化社会」は私たちの前に真の意味でその姿を表すのではないだろうか。

最後にSCをご紹介いただき、資料作成にご協力いただいたスミス先生、国際交流基金助成事業を担当いただいた学生課の皆様、申請いただいた諸先生方に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

写真 13

